

5月12日は



看護の日



2023年度
「忘れられない看護エピソード
～いのちをまもり、支えるプロフェッショナル～」



生きるを、ともに、つくる。

公益社団法人 日本看護協会

はじめに

5月12日は「看護の日」です。

毎年、この日を中心に、厚生労働省と日本看護協会は「看護の心をみんなの心に」をメインテーマとして、全国各地でさまざまな事業を行っています。

この度、「看護の日・看護週間」事業で行ってきた「忘れられない看護エピソード」募集事業をリニューアルし「いのちをまもり、支えるプロフェッショナル」と題し、現場で働く看護職の皆さまから日々実践している看護のプロフェッショナルとしての専門性や魅力を、次世代を担う若い方々に伝えるエピソードを募集しました。ご応募いただきましたたくさんのエピソードの中から、受賞した3作品をご紹介します。

看護にまつわるエピソードが、若い方々に看護の魅力を伝え、将来、看護の道を目指すきっかけとなれば幸いです。

公益社団法人 日本看護協会

最優秀賞に選ばれた作品「看護師として、母として」がアニメーション化されました！
作品は、日本看護協会ホームページより視聴いただけます。





「看護師として、母として」

受賞者：糠塚 真由子さん

日々の仕事は絶えず忙しい。家庭ではまだ小学生2人の母としての役割もある。しかし、1人でも多くの看護師、特に今仕事を続けていこうかと考えるママナースに私の体験を知って欲しいと願っている。ここに想いを綴る。

来年度からは看護専門学校への異動が決まり、臨床で働く看護師は最後となる冬、事件は子供たちと出かけた先で起こった。私の目の前で女性我倒れていた。第一発見者の私は思わず、

「大丈夫ですか？」

と声をかけた。返答はない。そこからCPR（心肺蘇生法）が始まった。小学5年生の長女には思わず

「足持って！」

と移送の応援を依頼した。近くの方々にも応援を依頼し、私の指揮で行うCPR（心肺蘇生法）。救急要請、AED確保、その間も心臓マッサージを続ける。仕事以外で初めて遭遇するこの状況に、私の心臓マッサージの手は震えていた。しかし、（やるしかない！）。私の心はそう叫んでいた。応援者で交替しながら有効な心臓マッサージを行い、救急隊の到着を待った。

搬送が終わり、子供たちの気分を鎮め、帰路の車へ乗り込む。私は全身の力が抜け、運転だけに集中していた。すると長女が私に向けてぽつりと言った。

「ママ、かっこよかった。私もママみたいになりたいと思った」

と。不規則勤務で夜もいないことがたびたびあり、寂しいと訴え続け、「私はナースになんて絶対にならない！」そう言っていた長女から発せられたその言葉を、涙なくして聞くことはできなかった。

（家庭との両立に悩み、退職しようかと何度も迷ったが、今まで臨床で働く看護師を続けられて本当に良かった）と、心から思えた日であった。

次世代を担う我が子に自身の体験をもって「私も倒れている人に声をかけられる人になりたい」という想いを与えられた私は、なんと幸せだろうか。仕事と家庭の両立で忙しく、体はとても疲れていたが、心は満たされた。この体験を今度は1人でも多くの看護学生に伝えていき、働き続けられる看護師が増えていくことを願っている。



「さいごまでみてね」

受賞者：河野 佳代さん

コロナ禍の初冬。息苦しさを訴えた父は、検査の結果緊急入院となった。

肺がん。余命3カ月。

面会禁止の病棟の奥に消えていく、車椅子の父の背中。

自動ドアが、目の前で静かに閉じる。

私は看護師だ。冷静になれ。これから何が起きるのか予測が出来る。

ケアマネさんに連絡して、在宅の準備を整えよう。

大丈夫。これまで多くの方の人生の最期を、共に過ごさせていただいたのだ。

家族とも、いつかは別れの時が訪れることを覚悟してきたはずだ。

頭は冷静に働くのに、胸が痛くて涙が止まらない。

父と家族にとって最善の看護師であろうと心に誓いながらも、娘としての私は不安で一杯だった。

自宅に戻った父は、医療用麻薬に抵抗を示していたが「佳代が良いと言うなら、使う」と受け入れてくれた。安楽な姿勢、便秘の調整、呼吸法。

佳代が言うことをやってみたら呼吸が楽になったと、喜んでガラケーで報告してくれた。

どうか、この穏やかな時間が続きますように、と空に祈る日々。

でも、その祈りは届かなかった。

急激な呼吸状態の悪化に、胸を押さえて脂汗を流す父。

医師の到着まで30分。

瘦せた背中を擦りながら、私はせきを切ったように号泣してしまった。

「何もできなくても、そばにいたことが力になるのですよ」

たくさんの家族に掛けてきた自分の言葉が、むなしく頭をよぎる。

苦しむ本人を前にして感じる無力感は、圧倒的だった。

鎮静が始まる直前の、父の言葉。

「ありがとうね。さいごまでみてね。お世話になります」

「うん。約束する」

最後の会話は、看取りまでの折れそうな私の心を支え続けてくれた。

早春の静かな朝。小さくなる父の呼吸を見つめながら手を握った。

「ずっと信じてくれてありがとう」

詰まる声を振り絞って声を掛けると、力強く握り返してくれた。

その時、気づいた。

「さいごまでみてね」は、見てね、観てね、見てね。父の願いが全て込められていたのだ、と。

看護師の娘である私を、育ててくれた言葉だったのだと。



「未来を見据えて」

受賞者：菱谷 怜さん

重症肺炎……、人工呼吸器……、シリンジポンもたくさんだ。

私は新人看護師の頃、重症集中治療室で働いていた。看護学生の時には関わることがなかった重症な患者さんへの看護や、触れたこともない機械の扱い、そこに表示される数値の意味を学ぶのに必死だった。毎晩、勉強を続けた。

その当時の私は目の前の患者さんと向き合えていなかった。今日、看護するのは「重症肺炎の患者」、この間は「人工透析の患者」……。私はいつも患者さんではなく、疾患や機械と向き合っていた。自分が勤務している間は、とにかく何も起こらないようにと、疾患や機械の知識について頭を巡らしながら働いていた。

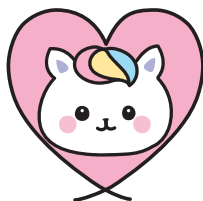
ある日、五十歳代の「重症肺炎の患者」を受け持っていた時、循環動態が悪くなり、先輩看護師と一緒に、どのように看護をするか話していた。すると、先輩看護師は、「この人はまだまだ社会で活躍しなきゃいけないから助けていな」と独り言のように言った。小さな声だったが、私の看護の未

熟さを気付かせるためには十分すぎるほど大きかった。この先輩は、目の前の患者の未来まで見据えて看護をしているのか、と。

私は、患者が抱える疾患や装着している機械ばかり考えていたが、本当に看護すべきなのは目の前の患者本人なのだ。そこから、患者さんについて話す時、「肺炎の患者さんが」ではなく「○○さん」と必ず名字で呼ぶように心がけた。当然のことではあるが、私はそれができていなかった。そして、患者さんの年齢や背景情報から、その人がこれから歩む未来を想像した。会社に勤めていれば、会社で活躍する姿、子どもがいれば、子どもと遊ぶ姿。

先輩看護師の何気ない一言で、看護師が患者さんの今だけではなく、未来を見据えて看護をしていることに気付かされた。誰かの命を守るためには、患者さんの人生に思いをはせることが必要なのだ。私は、今、患者さんの人生の一部に関われることにありがたみを感じている。

5月12日は



看護の日

<https://www.nurse.or.jp/>



看護の日

【主催】 厚生労働省 / 日本看護協会

【後援】 文部科学省 / 日本医師会 / 日本歯科医師会 / 日本薬剤師会 / 全国社会福祉協議会 / 日本病院会 / 全日本病院協会 / 日本医療法人協会 / 日本精神科病院協会 / 全国自治体病院協議会 / 日本助産師会 / 日本精神科看護協会 / 日本訪問看護財団 / 全国訪問看護事業協会 / 全国老人保健施設協会 / 全国老人福祉施設協議会 / 日本労働組合総連合会 / ささえあい医療人権センターCOML

【協賛】 テルモ (株) / 東洋羽毛工業 (株) / ナガイレーベン (株) / パラマウントベッドホールディングス (株)